

青少年向け娯楽雑誌“平凡”に あらわれた価値指向

原 喜 美

1. 序

戦後の日本において、人間性の解放にともない、青少年があらゆる社会悪にむきだしにさらされ、青少年の不良化、とくに暴力犯罪、性犯罪の増加、家出、自殺等、数多くの問題が我々の関心をよんでいる。青少年非行は、戦後の経済的、社会的混乱から立ち直って安定をとり戻した1952年以後一時下降的傾向を辿ったが、1957年以来、再び上昇ラインにあり、しかも、犯罪そのものが、質的にも兇悪化し、年齢低下、累犯化、集団化の現象が見られることは、憂慮に堪えないところである。その原因として考えられるることは、「青少年はその時代の鏡」といわれるよう、一概にいえば、青少年をとりまく、家庭環境、社会環境の影響ということができるであろうが、その病根は、我が国の封建的な社会の仕組み、激変する時代の動きの中に深く蔵されているのであろう。

特に1953年以来、青少年の不良化は読物の影響、殊に商業主義と結びついて、巷間に横行する不良文化財の影響によるもので、「青少年を有害な文化財から守れ」という声が高くなってきた。その経路を辿ると、先づ、1953年12月22日、中央児童福祉審議会で始めてこの問題がとり上げられ、「性的出版物、映画等の児童に対する悪影響の防止に関する決議」がなされ、翌23日、第2回青少年問題全国会議において、不良文化財の取締り法制化要望という形で表面化した。つづいて、1954年1月、第10回青少年保護育成運動実施要綱の目標として、「不良玩具、出版物、映画等の追放」が掲げられた。中央青少年問題協議会に、青少年に有害な出版物、映画等の対策専門委員会が設置されたのは1954年4月であった。同年の秋には相

ついで系統の異なる二つの会議が開かれた。即ち一つは文部省主催による文化会議で、他の一つは、日本子どもを守る会主催のものであった。両者共、青少年を不良文化財から守ることが主題としてとり上げられたが、前者は法制化要望に傾き、後者は思想、言論の自由という見地から、法制化に反対するというように、判然と二つの流れに分れていった。1955年には、悪書追放運動は、一つの国民運動として、全国的に拡った。（日本読書新聞・昭和30・11・28）中央青少年問題協議会、厚生省児童福祉審議会による、青少年保護育成運動を中心とするものと、これに呼応した、警視庁防犯課、母の会連合会（会長宮川まさき）などの、いわゆる三ない運動（見ない。買わない。読まない。）の動きがあると共に、他の一つの流れは、日本子どもを守る会を中心として、現場教師、母親などによる、読物の悪い内容をよくしていこうという動きである。この二つの流れは、目的を同じくしながら、互いに相容れることのできないカベにつきあたり、次第に本質的な問題の追究からずれていく傾向にあった。

1954年～56年頃の新聞、週刊誌、雑誌は、殆ど毎日のように、青少年と読物の問題をとり上げ、世間の注目を浴びた。その結果として、業者の自粛、半世代つづいた少女雑誌の廃刊、その他少年少女雑誌数種類が休廃刊となった。（毎日新聞 昭和30・6・5）しかし、読物が青少年にどのような影響を与えるかをたしかめることは、極めて困難である。ピストルの引き金的効果があった、いくつかの事例から、青少年の不良化は読物の影響によると、性急に断定してしまうことは許されない。警視庁からこの点を裏づけるような報告書（有害出版物の青少年に対する影響）も出されているが、そのとり上げ方に疑惑をもつてゐる。また不良文化財ということが取り騒がれているにも拘らず、いかなるものを不良文化財と規定するかについては、極めてあいまいである。そこで、この問題、すなわち青少年と読物の問題について研究する一つのアプローチとして、最も広くよまれている青少年向けの雑誌を選び、その内容分析を行うことにより、実態を把握することが急務であると考えられた。この方面の研究については、二

三の研究を除いて、多くは思いつき程度の断片的なものに過ぎないのである。そして実態を知らずに騒ぎだけが大きくなっていく傾向があった。

2. 雑誌“平凡”をとり上げた理由

大衆娯楽雑誌“平凡”は、1945年10月発刊以来、年々発行部数を増加し、最近2～3年は、約130万～140万部出している。実際には、自分で買わないで、借りて読む人が多く、“平凡”自身は、「800万読者へ」と呼びかけている。⁽²⁾毎日新聞社の読書調査（第1表）によっても明らかであ

第1表 毎月（週）買って読む雑誌

(1949—58年毎日新聞社読書世論調査による)

年度 順位	1949	1950	1951	1952	1953	1954	1955	1956	1957	1958
1	R D	主婦の友	主婦の友	家の光	家の光	家の光	家の光	家の光	サン毎	家の光
2	主婦の友	R D	文春	文春	文春	週朝	週朝	週朝	週朝	サン毎
3	主婦と生活	文春	主婦と生活	主婦の友	平凡	サン毎	サン毎	サン毎	家の光	週朝
4	婦人世界	婦人クラブ	平凡	平凡	週朝	文春	文春	文春	文春	平凡
5	婦人生活	主婦と生活	婦人クラブ	R D	サン毎	平凡	平凡	平凡	平凡	文春
6	婦人クラブ	婦人生活	婦人生活	週朝	主婦の友	主婦の友	主婦の友	主婦の友	主婦の友	主婦の友
7	ロマントス	週朝	R D	婦人生活	婦人クラブ	主婦と生活	婦人生活	婦人生活	週読	週読
8	文春	サン毎	サン毎	サン毎	主婦と生活	婦人生活	婦人クラブ	主婦と生活	週サンケイ	週新
9	サン毎	家の光	家の光	婦人クラブ	婦人生活	婦人クラブ	主婦と生活	婦人クラブ	婦人生活	週女
10	家の光	婦人世界	週朝	主婦と生活	R D	R D	週読	週読	主婦と生活	主婦と生活
13		平凡								
31	平凡									

R D = リーダーズ・ダイジェスト

第2表 書店で最もよく売れる雑誌（1958年度）

順位	雑誌名	実数	(毎日新聞社調査)
1	平凡	56,867	
2	文芸春秋	37,922	
3	主婦の友	35,058	
4	明星	33,110	
5	暮しの手帖	32,758	
6	婦人生活	31,556	
7	主婦と生活	25,595	
8	週刊朝日	25,080	
9	サンデー毎日	23,409	
10	婦人クラブ	22,071	

第3表a “平凡”定期購読者（1958年度）

性別	年齢別		
男	37.9%	16—19	22.0%
女	62.1%	20—29	39.1%
		30—39	15.8%
		40—49	14.2%
		50—	8.9%

るようだに、発刊後4年目に31位にあらわれたのに、翌1950年には、一躍13位にのし上り、つづいて51年には4位に跳躍した。爾来、週刊誌の出現により、他の雑誌は大巾に変動しているにもかかわらず“平凡”は常に5位を下らず、若い世代の雑誌としては、過去10年間トップを占めている。

「占領軍の愚民政策のあらわれだとか、戦後の若人に通有な軽薄さに媚びるもの」という批評を“平凡”に加える向きも少くないが、しかし、永年変わぬ人気をかち得ているという客観的事実は見逃がすことはできない。編集者側の話によると、読者の年齢層のねらいは、15歳～16歳で、20歳前の人々に読んでもらうために編集しているとのことである。実際には読者層はかなり広く、12、13歳から60歳までにわたり、男女の比率は、3:7または4:6の間を動いている。年齢別購読者は、第3表aのように

20代が最も多いが、10代の購読者数を、“平凡”より上位にある“家の光”または週刊誌と較べると、数においては“平凡”が最高位を占めている。その上、借りて読む雑誌としては、常に“平凡”が第1位である。以上のような事実から、若い世代に及ぼす“平凡”的影響力は無視できないものがあるのであろう。

編集方針としては、「賑やかに、あたたか味にあふれ、若い人々の気持にピッタリと、密着してはなれないでいきたい」というのが狙いであることからも“平凡”的内容には、若い世代の感じ方、ものの考え方反映されていると見ることができるであろう。そこで“平凡”に掲載されている小説の内容分析を行うことにより、現象的なものの背後に流れている価値

第3表b “平凡”的読者層（1958年度）

学歴別	
9年以下	65.9%
10年—12年	33.4%
13年以上	0.7%
職業別	
官公庁大会社幹部自由業	0.3%
事務員	5.9%
中小店主	8.1%
同従業者	11.3%
農漁業者	17.6%
工具・職人運転手	20.0%
単純労務者	0.3%
学生	3.9%
主婦	16.4%
其の他	16.2%
地域別	
六大城市	11.9%
市部	44.3%
郡部	43.8%

指向を探り出し，“平凡”の実態を見きわめると共に，間接的には“平凡”を熱烈に支持する読者層のもつものの考え方，感じ方について，何らかの手懸りを擱みたいと希望するのである。

ここで一言ふれでおかななければならないのは“平凡”読者層の社会的背景である。第3表bにより明らかであるように，読者の学歴はその²/₈が，中学卒業またはそれ以下である。高校卒業以上の学歴をもつものは全体の0.7%で極めて少い。職業別分布を見ても，工員，職人，運転手，農，漁業者，主婦等に購読者が多く，自由業者などには殆どない。中学生，高校生の“平凡”を読む程度は，男女合せて，中学3年になって始めて10位に平凡を挙げているし，高校1年で8位，2年13位，3年12位と次第に下降していく傾向にある。“平凡”の読者層の大半は，義務教育を終え直ちに実社会に巣立っていく若い人々である。昭和33年の中学校卒業者の高等学校進学率が⁽⁴⁾，53.7%であるということから考えても，中学校卒業者の約半数は，卒業後殆ど組織的な教育の機会を与えられず，社会の下積みとなつて，農業，漁業，工場労働，家事労働に，嘗々として従事し，日本の産業を担い，やがては，社会の中堅として世論を構成していく人々である。この階層に“平凡”の購読者が多いということは，一層研究の必要性を加えるものと考えられる。義務教育だけで実務に就くグループは，中学校時代には，進学組の犠牲となり，忘れられたグループである。不備な職業教育を受け，社会悪に満ちた中に野放しにされ，多くは転々と職を変え，数年後に漸く定着する⁽⁵⁾のである。近年，義務教育の年限延長，全員高校進学という声もきかれ，勤労青少年の教育の必要が僅ながら強調され，真剣にとり上げられてきた時，この層の人々が影響を受ける価値観について考察を与えることは，日本の民主化という視点から考えても意義をもつものであろう。大衆娯楽雑誌“平凡”を取りあげる理由はここに存するのである。

3. “平凡”の内容分析の方法

調査対象として、1957年、1958年、1959年発行の“平凡”から、四季を代表するもの各々1冊づつ選び、計12冊について、2人づつの調査者がそれぞれよみ、量的に内容構成の分類、中心テーマ別分類をするばかりでなく価値指向⁽⁷⁾（人間性指向、時間指向、対人関係指向、対自然関係指向、活動様式指向）について、充分予備知識をもち、その枠組を基準として、13の小説を分析した。2人の調査者の一致したところは、そのようにマークしたが、疑問の点は？を付して残してある。話のつづき等の為、調査対象にならなかった号についても、必要に応じて、自由に参照した。

4. 内容分析の結果

先づ一通り、“平凡”的量的内容構成について述べる。第4表aにあらわれているように、頁数からいっても、華やかな色刷りのグラビヤが多く

第4表a [平凡] の内容構成

年度	1959	1958	1957
写真・絵	46.7% { 日本的31.1% 西欧的68.9% }	58.5% { 日本的35.0% 西欧的65.0% }	54.7% { 日本的27.3% 西欧的72.7% }
文 字	53.3%	41.5%	45.3%

第4表b

年度	1959	%	1958	%	1957	%
総頁数	274 頁	100	301 頁	100	307 頁	100
芸能関係	137	47	169	56	152	47
スポーツ	13	5	8	3	8	3
小説	60	23	78	25	69	23
漫画	24	9	21	7	21	7
広告	18	7	17	6	38	13
読者の頁	13	5	3	1	10	4
その他	9	4	5	2	9	3

写真・絵と文字とは約半々となっている。どの頁も文字だけの所は1頁もなく、視聴覚に訴えて、効果的に大衆の心をとらえている。それ等の写真、絵は、日本的要素と、西欧的要素が入り組み、全体としては、日本的なものは $\frac{1}{3}$ に満たない。「大衆娯楽の面では、マスコミュニケーションは、大衆を、古い日本的情趣の世界へ誘っている」⁽⁸⁾点が戦後日本のマス・コミュニケーションの特徴であると指摘されているが、その例に洩れず、日本的なものは内容的には封建的、前近代的要素を多分に含んでいる。また、“平凡”全体を通じて、漢字には悉くふり仮名がついていることも目につく。

次に内容を種類別に分けると、第4表bのようになる。“平凡”は“歌と映画の娯楽雑誌”と銘打っているだけに、芸能関係に約半分を割いている。約 $\frac{1}{4}$ を小説にあて、1959年には、過去2年間よりも、一層スポーツ関係の写真記事を多く集録している。相撲、野球、水泳、ボクシング等で、相撲、野球の選手達は、映画スター並に扱われている。読者の頁には、スターへの質問、便り、“平凡友の会”座談会等を含み、読者が高嶺の花と

第5表 中心テーマ別分類(平凡の小説)

年 度 テーマ	1959	1958	1957	平 均
性	23.8%	18.2%	16.2%	19.4%
恋 愛	23.8%	31.8%	30.0%	28.5%
友情と恋愛	7.9%			2.7%
暴 力 (やくざ、仇討)	17.5%	25.8%	37.9%	27.1%
兄弟愛と暴力	7.9%	3.0%		3.6%
親子関係と 恋 愛			2.7%	0.9%
其 の 他	19.1%	21.2%	13.2%	17.8%

して眺めているものに対して手が届きそうな錯覚を起させる。広告欄には、二重まぶた、隆鼻術、近眼治療、歌手および映画俳優への道等読者の興味を引く安易な広告が目立っている。その他の部類に属するものとして、服飾、料理、ニュース、おしゃれ、等の他、皇室関係の記事が特に多い。23%～25%を占める小説は、殆ど連続小説で、その多くは映画化されている。

第5表の“平凡”に連載されている小説を中心テーマ別に分類したものを見ると、大別して、性と恋愛ものが多いということができる。2、3例をあげると、「わたしの耳は貝の殻」と題する小説は、サーカスという特殊な環境にいる一少女が女として目覚めていく過程を、性の観点から描いているが、そこには、なんら人生の目的も、眞の経済観念も見出だされず、危機が訪れると、降って湧いた幸運によりうまくおさまるという筋書きである。⁽⁹⁾編集者の言葉によると、「性については、日本では従来陰蔽し過ぎた。不必要に刺戟を与えて、かき立てることもないが、教育的意図をもって、知らしめることに努力している。無知があやまちの原因となるので、若い人々と共に考え、共に遊ぶということをモットーとしている。」性についても、非常に露骨な扱い方はしない代りに、また深く掘り下げることもしていない。気軽に、暇つぶし的に読むだけで、名作と異り、後に残らない。積極的な害はないが、物を考えなくなるのではないかということは、調査者の一致した印象である。「愛を誓いし君なれば」も上述の小説と同じ傾向をもつ小説で、誤解、邪推など、障害の多い恋愛と、偶然的運命のもつれ、美貌の若い娘に対する中年男の野心といったものが絡み合って、最後は非現実的な幸運の訪れにより、ばたばたと万事好都合に解決する筋書きである。結婚にゴールインすることが人生の唯一の目的であるような印象を与える。⁽¹⁰⁾南博は、日本の大衆娯楽が大衆に与えているものは、適度な心理的解放感をもたらすことにより、大衆の心理的エネルギーを健康的に再創造する本来の娯楽の役割とは反対に、多くの場合、大衆の心理的エネルギーを歪んだ枠に押しこめ、圧力をかけてうっ積させることにし

か役立っていないと指摘しているが，“平凡”の小説もこの特異性からはずれていないことが分る。話の発展の経路は作為的で、いつも偶然に支配され、安易な解決法により、非現実的な夢の世界にはかない希望を繋いでいることは、あきらめ的運命主義と何等異なるところがない。

やくざ、仇討、などの暴力が恋愛ものとからんだ物語として、「白い波濤」、「木曾の花道」、「月下の若武者」などがある。いづれも勸善懲惡的で、善人にスーパーマン的力があって、素手でやくざと対決して勝ったり、正義の味方、弱者の味方は、どんな強敵をもどんどん打ち倒していくという話の中には、英雄崇拜的傾向がつよい。⁽¹¹⁾ 戦争マンガにもあらわれているように、正義の名による暴力主義の肯定、力にたいしては力をもってたか向うという考え方、すべて正義のためならという単純な考え方で統一して、その美名のもとに、結局暴力を礼賛するという誤りに陥っているのではないであろうか。大衆娯楽の強制的な無選択性という性格からみても“平凡”の中に反映している暴力にたいする考え方は、好むと好まざるとにかかわらず、若い人々の心に浸透して、大きな影響力をもつものであるということは否定できない。総じて、ストーリーの設定が安易で、見せかけの感動しか与えず、高いところで読者をひっぱっていく力を欠いている。⁽¹²⁾ 読書新聞にとり上げられた少女小説の実態と相通するものがある。

5. “平凡”の小説に対する価値指向スキームの適用

内容分析を行うばかり、単に現象的な、皮相的な事実のみをとり上げて論じても、なかなか実態を把握できるものではない。しばしば、悪書とか良書とかいう問題が取り沙汰されるが、一体何を規準にして善惡の区別をつけるか、非常に曖昧である。青少年に望ましい書物という場合も、成人の立場からみて望ましい書物は、かならずしも青少年の立場から考えて望ましいものであるとは限らない。今回ここで内容分析の尺度として用いた価値指向のスキームは、筆者が数年来関心をもって研究してきたものである。価値指向理論の構成そのものについても批判の声を聞き、また今回の

適用方法についても、主観的なバイアスは避けがたいものであったが、一応人間が当面する共通な、普遍的な問題が、フローレンス・クラックホーン⁽¹³⁾ (Florence Kluckhohn) による多方面からの研究の結果、巧みに整理され、文化を比較する際の一つの尺度として用いることができるので、一つの試みとして“平凡”に適用した。

簡単にその価値指向スキームを説明すると、F・クラックホーンは、人間が直面する、多種多様な問題を、五つの視点に集約して述べている。すなわち、(1) 基本的人間性は、善であるか、悪であるか。あるいは善でも悪でもないか、善でもあり悪もあるか。(2) 人間と自然の関係は、人間が自然を征服しているか、自然に服従しているか、自然と調和を保っているか。(3) 時間的拡りにおいて、過去、現在、未来の次元の中、どれを最も重視しているか。(4) どのような人間の活動様式が、最も高く評価されているか。気分本位的であるが、工夫実行的であるか。(5) 対人関係の支配的なり方はどうであるか。上下的関係が強いか、横の関係が支配的であるか、あるいは個人的傾向が強いか。F・クラックホーンの案出した価値指向の質問票は、上述の五つの基本的な問題を骨子として、23の仮設的情況を設定し、回答者に自由に選択させたものである。

今回は、この価値指向スキームを、“平凡”の小説の内容分析の尺度とした。すなわち、ストーリー全体を通じて、これら五つの項目（人間性、対自然関係、時間、活動様式、対人関係）について、作者がどのように取り扱っているかを読みとろうと試みたのである。“平凡”はハーモニカ族の趣味と一致し、低俗であるとか、逆コース的であるとか、恋愛ものが多いとか、いろいろの批評はよく耳にするが、はたしてその底流となっている価値観はどういうものであるかということは、把握されにくい。この試みも決して完全なものではなく、不備な点の多くあることは、誰よりも筆者自身が認めるところであるが、一つのアプローチとして、何かしらの示唆を与えることができれば幸いである。1957年～59年までの過去3ヶ年にわたる連載小説13篇を選び、それ等を注意深く読み、分析した結果あらわ

第6表 “平凡”の小説にあらわれた価値指向

作品	価値指向	人間性			時間			対人関係			対自然関係			活動様式		
		善	善惡	悪	過去	現在	未来	縦	横	個人	服従	調和	征服	気本分位	折衷	工実夫行
(1)わたしの耳 は貝の殻		○				○				?	○			○		
(2)勝 負		○				○		○					○			○
(3)愛を誓いし 君なれば			○			○		○			○			○		
(4)ラケット息 子		○				○			?		○			○		
(5)白い波濤		○				○			○			○		○		
(6)木曽の花道			○			○			?			○		○		
(7)雪太郎乳房			○			○			?				?	?		
(8)遠い旅		○				○			○		○			○		
(9)ゴメン遊ば せ花むこ先生			○				○	○				○			○	
(10)愛 河		○				○		○			○			○		
(11)花の青空			○	○			○			○			○			
(12)花は嘆かじ		○			○			○			○			○		
(13)月下の若 武者			○	○			○			○						○
計		7	6		3	9	1	7	2+3	1	8	2	2+1	9+1		3
%		53.8	46.2	0	23.1	69.2	7.7	53.8	38.5	7.7	61.5	15.4	23.1	76.9	0	23.1

高 三	対自分%	11.1	43.9	45.0	9.5	54.1	36.4	18.0	18.9	63.1	37.9	0	62.1
N=133	対世間%	29.6	41.3	29.1	39.4	34.3	26.3	29.3	28.2	42.5	39.2	0	60.8

れた価値指向は、第6表の通りである。

“平凡”に価値指向スキームを適用した結果、人間性については、善であるという前提のばあいと、善でもあり、悪でもあるという考え方が約半々に出ている。人間性は悪であるが、改善することのできる悪であるという、清教徒的な厳しい見方は、13篇いづれのばあいも全然あらわれてこな

い。いわゆるムード的に均一化された“平凡調”は、善玉はあくまでも善であり、悪玉はあくまでも悪である。善玉と悪玉との斗争により、善玉は必ず偶然的な運命によって悪玉を征服するか、悪玉から逸れるというような設定になっている。そこには、人間の生き方やあり方を探求する倫理も、人間尊重のヒューマニズムも見出すことはできない。⁽¹⁴⁾鶴見俊輔が日本の大衆小説の分析にあたり、理想的人間像の第一の類型について、「人間は、生れつき、善玉と悪玉にわかれる。悪玉はすくい得ない。民衆は全体としては、善なる性質をもつ。しかし権力をもつ悪玉に邪魔されて仕合わせになれない」と述べているが、“平凡”の小説にも相通ずるものがある。そして全体としては宿命にしばられながらも、何となく明るさを保っている。⁽¹⁵⁾“平凡”社長岩堀喜之助氏は、若い世代が中年層と異なる点の一つとして、「既成の思想で形成化された優等生的な人間タイプに対する抵抗感」をとり上げているが、人間性という視点からみると、何ら新しい味は感じられず、むしろ、旧来の価値観に、新しい衣を着せたに過ぎないのでないかと感じられる。

時間指向については、現在指向が優勢で、23.1%が過去指向で、未来指向は極めて僅かである。近代的な、中流階層の特徴としては、未来指向が優勢である筈であるが、ここでは、行きあたりばったり的な、その場にならなければ何ともいえない、あきらめ的な行き方が目立つのである。人生の目的をはっきりと立てて、予定通り仕事を運んでいく計画性に欠けるところがある。これは、“平凡”に限らず、現在の日本人の暮らし方、考え方と一致するものである。

対人関係については、二三疑点を残しているが、過半数が上下の関係に重点を置き、個人主義的な傾向は余り強くない。上下関係の重視も、年齢的上下関係でなく、身分的上下関係、富の多寡による上下関係を重視している。横の関係を重んずるばあいも、自分の身近な人にのみ注意が向けられ、その人々の幸福というものが問題にされる。この点も、「夢とおもかげ」にあらわれている価値体系と相通ずるものがある。

対自然関係については、自然、運命を積極的に征服し、新しく切り開いていこうとする意気ごみには乏しく、支配的な傾向は、自然に服従する行き方である。すべてが偶然的運命により支配され、宿命的なにおいがつよく、運命にもてあそばれ、また運命をもてあそぶような描写が多い。人間の意志の力や理性では制御できない本能や、不倫の愛に悩む人間を描き、自分としてはどうしようもないという生き方が見られる。

活動様式は、気分本位的傾向がつよく、工夫実行型は $1/4$ にもみたない。明るく、面白おかしく安易に過していくところに、“平凡調”があるので、人一倍仕事をして、能率を上げ、実績によって自己の地位を確立していくという近代的な姿勢からは程遠い感を受ける。

筆者が三年前、東京近郊の高校生に対して、F・クラックホーンの価値指向の質問票を用いて、調査した結果を、“平凡”にあらわされた価値指向と比較してみる。一方は内容分析によるものであるし、他方は質問票にもとづく調査であるので、比較することは、あるいは妥当性を欠くのではないかとも考えられるが、同じ規準を用いたということから一応比較してみると、かなりの違いがあらわれている。高校三年生が自分自身について評価しているばあいは、時間指向については、未来指向が現在指向より稍優勢であり、人間関係については縦の関係よりは遙かに横の関係を重視し、対自然関係では、自然を征服するという近代的な姿勢を持している。活動様式については、“平凡”的ばあいと、逆転して、工夫実行型で、変転の激しい社会にあって、前向きの姿勢を保っている。(第6表参照)

⁽¹⁶⁾ 偶々ジョン・スピーゲル(John Spiegel)は、この価値指向スキームを用いて、ボストン地域における、子供向けテレビ番組の分析を行った。その結果、アメリカの中流階層の価値指向から、かなりずれたものがあらわれている。アメリカの中流階層の価値指向というものは、F・クラックホーンによれば、人間性は、基本的には善でもなく、悪でもない。善になったり、悪になったりするのは、それぞれ各自の経験によるのである。時間指向は、明らかに未来指向であり、自然に対しても、征服できるという自

信をもち、人間関係は、自立的、個人主義的傾向がつよく、活動様式は工夫実行型が支配的である。ところが、テレビの番組では、過去指向であり、工夫実行型であるよりはむしろ美的感覚を重んじ、気分本位型に傾き、人間性は、善玉と悪玉とをはっきりと写し出している。ジョン・スピーゲルは、テレビの番組はどのように構成されなければならないかというを教示するのではなく、むしろスピーゲルはアメリカの中流階層の家庭における子供に対する圧力から、子供が解放され、テレビの番組の中に夢を追い、心理的逃避を行っているのであると指摘している。

“平凡”にあらわれた価値指向について、その購読者の中の多くがおかれている社会的経済的背景から考えても、黙々として一日中従事している、重苦しい、仕事から解放され、“平凡”の中に夢をもとめ現実逃避を試みるということも推測できる。しかし、また一方では、マス・コミュニケーションのもつ教訓性という観点からいうと、購読者の社会的態度を変容していく目に見えない力をもつものであるから、平凡にあらわれた価値指向のあり方は複雑な問題を含んでいるといふことができる。封建的、前近代的残滓を多くとどめている価値指向は、日本のマス・コミュニケーションの特質の端的なあらわれであり、また日本社会の民主化という問題とも深い関連をもつものと考えられる。

(本学助教授)

本題については、Gordon T. Bowles 先生から多くの御教示を受けた。

“平凡”の分析にあたっては、萩野美佐子、秋山絢子、鈴木豊治の諸兄姉の援助を受けた。厚く感謝の意を表する。

註

- (1) 森田宗一「青少年」法学新書 6、河出書房発行、昭和31年4月30日、119頁—122頁。
- (2) 毎日新聞社編「読書世論調査」第12回、1958年度調査。
- (3) 「社会と文化の心理学5」河出書房発行、昭和30年7月15日。78頁。
- (4) 「読書世論調査」

- (5) 文部省編「わが国の教育水準」昭和34年11月20日。
- (6) 清水義弘「教育社会学の構造」東洋館出版社発行, 昭和30年5月10日。
242頁—243頁。
- (7) 拙著「日本人の価値指向に関する研究」ICU教育研究第4号,
昭和23年12月。
- (8) 南博「現代のマス・コミュニケーション」要書房発行, 昭和29年4月5日。
86頁。
- (9) 筆者が“平凡”編集責任者と面接した際の要旨である。
- (10) 南「現代のマス・コミュニケーション」84頁。
- (11) 日本読書学会編集「読書科学」10, 19頁。
- (12) 日本読書新聞 昭和30年11月28日。
- (13) Kluckhohn, Florence : "Dominant and Variant Value Orientations",
in Clyde Kluckhohn and Henry A. Murray (eds) : Personality in
Nature, Society and Culture (New York, Alfred A. Knopf, 1954).
- (14) 思想の科学研究会編「夢とおもかげ」昭和25年9月30日。56頁。
- (15) 「社会と文化の心理学 5」, 75頁。
- (16) Spiegel, John : "The NAEB Seminar on Children's Television Pro-
grams" (The National Association of Educational Broadcasters, 1959)

A Content Analysis of the "Heibon"—A Popular Magazine Most Widely Read by the Japanese Youth

(English Résumé)

Kimi Hara

This is an attempt to analyze the content of the "Heibon", which has ranked as the highest for these ten years among the youth-directed magazines with a sale of more than 1,300,000 copies each month. Though the readers of the "Heibon" range from 12 or 13-year-olds to over 60-year-olds, both male and female, 2/3 of them are those in their teens or in their early twenties. The majority of the readers have not received education beyond junior high school. Most of them are salesmen, drivers, artisans, unskilled or semi-skilled laborers, farmers, home-helpers or housewives. As the editor of the magazine says that they are trying hard to reflect the thinking and feeling of the young people who read the "Heibon", it may be considered that the content of the magazine reveals much of the thinking and feeling of the young people as well as influencing to a degree their value formation.

In analyzing the content of the 13 stories which appeared in the "Heibon" from 1957 through 1959 the scheme of value-orientations devised by Dr. Florence Kluckhohn, a sociologist at Harvard University, was applied. It was discovered that as to "time" they are "present-oriented", "activity", "being" rather than "doing"; "relatedness", "vertical" rather than "collateral" or "individualistic"; "man-and-nature" "subservient to nature" rather than "over nature"; and lastly as to "human nature" they are either good or bad always creating conflict between the good and the evil. There remains in the value-orientations revealed in the stories of the "Heibon" much of the feudalistic and undemocratic presipitate which on the surface is disguised in Western and modernistic covering.